

2021. 11. 25 (木)

知ろうという意思

渡 邊 勉

数字から社会を見る

私はデータ社会学専攻分野の教員として大学でデータ分析の方法を教え、また社会調査のデータを分析することで研究をしています。特にここ数年は、アジア・太平洋戦争の研究をしています。従来の戦争研究の大部分は文献資料や聞き取りといった質的研究でしたが、私は戦争研究を、計量分析つまり数字で社会を捉えるという方法でおこなっています。

アジア・太平洋戦争では日本人は310万人以上が亡くなっているといわれており、このうち100万人以上の遺骨がまだ戻ってきていません。またこの戦争で徴兵された人は700万人以上といわれており、膨大な数の人たちが巻き込まれた戦争だったといえます。

ところで現在われわれは、コロナ禍という状況の中にいます。このコロナ禍という状況も戦争と同じように、われわれみんなが巻き込まれている特殊な事態だといえます。今朝調べてみたところ（2021年11月24日現在）、感染者数の総数は172万7,067人、死亡者数は1万8,365人、ワクチン接種率が71.52%となっていました。こうした数字が毎日メディアから流されてくるわけです。

戦争もコロナも社会全体への影響が大き過

ぎるので、われわれはその影響を数字で見る
ことしかできないという側面があるわけ
です。そうすると、私たちは、数字が示され
るとそれだけで社会が分かったような気にな
るところがあるような気がします。しかしそれ
はすごく危険なのではないかと、私自身研究
している時に考えるようにしています。

数字の危うさ

私は広島原爆の研究者ではないのですが、
ここで少し広島原爆の話をしたと思います。

広島に投下された原爆による死者数は、
45年の12月末までに約14万人といわれ
ています。約55万人が被爆しているといわ
れていますが、その数がとても大きいとい
うのは、おそらく誰もが感じるのではないかと
思います。この数字の大きさに対して、石原
吉郎というシベリア抑留された詩人が次のよ
うに言っています。

「私は、広島告発の背後に、「一人や二人が
死んだのではない。それも一瞬のうちに」と
いう発想があることに、つよい反発と危懼を
もつ。一人や二人ならいいのか。時間をかけ
て死んだ者はかまわないのか。戦争
が私たちを少しでも真実へ近づけたのは、こ
のような計量的発想から私たちがかりうじて

脱け出したことにおいてではなかったのか…
 広島を「数において」告発する人びとが、広島に原爆を投下した人とまさに同罪であると断定することに、私はなんの躊躇もない。一人の死を置き去りにしたこと。いまなお、置きざりにしつづけていること。大量殺戮のなかのひとりの重さを抹殺してきたこと。これが、戦後へ生きのびた私たちの最大の罪である」

このように、数字の大きさを事態を評価するという態度は、現代の新型コロナウイルスをめぐる状況にも当てはまると思います。

実際、アジア・太平洋戦争と現在のコロナ禍の類似性を指摘することが多いように思います。その背景には、数字によって社会全体をひとまとまりとしてとらえるという考え方があるように思います。このように社会全体をひとまとまりとして見ることは、みんなと同じでないといけないうという圧力のようなものを作り出し、みんながマスクをしないといけないう、みんなが自粛しないといけないう、みんなと一緒に何かしないといけないうという状況をつくりだしているのではないかと思います。そこには暗に排除の論理が働いていて、数からでは見えない人たち、虐げられている人たち、あるいは死んだ、亡くなった人たちというものを、おそらく「置きざりにしている」、さらに排除しているという側面があるのではないかと思います。

ここで共感という今日のテーマにつなげたいと思います。共感とは何なのか。

石原の指摘によれば、私がおこなっている計量的な研究は、おそらく最も共感から遠いところにあるアプローチだと思います。数字でわかった気になる。だからこそ、私は計量的研究、計量的発想においてまず大事なことは、分からない、分かり得ないところからい

かにして分かってもらうか、理解しようとするかという態度が大事なのではないかと思っています。

コロナや戦争のような状況において、われわれは同じ方向を向いて、そこから外れている人たちに目を向けられないような社会になっているということの問題性を、私は考えたいと思います。それが共感ということの第一歩なのではないかと私は思っています。

計量という方法は、実はそれを可能にすることができる方法と思っています。ある特定の人にのみ視点を合わせるのではなく、全体を見渡しその中の多様性を明らかにしようとする姿勢こそが、実は数字で社会を見ることの特徴なのだと思うのです。

安易に共感しないこと

もう一つ広島原爆についてお話ししたいと思います。関千枝子さんという人が、『広島第二県女二年西組』という本を出されています。彼女は被爆者です。被爆したのは広島第二県立女学校の2年生だったときです。二年西組は46人の学級でした。女学校なので13歳から14歳ぐらいの女の子たちです。このうち原爆投下後数日のうちに亡くなった生徒が38人おり、後に亡くなった人が1人いるので、39人が40歳になる前に亡くなっています。8月6日の勤労働員には7人が欠席しており、この7人のうちの1人が関さんだったのです。関さんは生き残りの1人でした。

この本を読んで気づくのは、関さんは、かわいそうだった、痛々しかったというような言葉は一言も述べていないということです。彼女は安易な言葉で同情しません。淡々と彼

女たちがどのようにして亡くなっていったのかを、一人一人丹念に追っていくのです。

彼女は、被爆はしたけれども亡くならなかった。当日はたまたま欠席したので、勤労動員で市内中心部にいなかった。彼女は死者ではないので、安易に分かる、共感することができないのです。

先ほどの石原は、広島告発に対する疑念として「告発する側がついに死者ではないという事実」を挙げています。死者に代わって告発することを「死者をとむらう途すら心得ぬ最大の頽廃」だと言います。関さんは同級生のことを丹念に調べても同級生とは決して同等になれないのです。それを関さんは知っているから同情はしないのです。

では、私たちはどうすればいいのでしょうか。

関さんは1970年代後半になって初めて、同級生たちがどのように亡くなったのかを調べ始めます。しかし原爆投下から30年も過ぎると遺族の連絡先がわかるのが10人にも満たないような現実があり、ほとんど何も分からない。38人の同級生たちがどのように亡くなったのかを誰も知らない何も分からないという状況、もちろん遺族も分からないという状況がありました。

関さんは、彼女たちがどのように亡くなったのかをきちんと知るということ、記録をきちんと残すということが大事だと考えました。そこでとことん調べるわけです。結局1人の同級生だけ遺骨が戻らなくて、かつ死んだ状況も分からなかったのですけれども、他は全員突き止めるのです。

知ろうという意思

私たちは、普段、意外と安易に理解してい

る、あるいは共感すると言ってしまうのではないのでしょうか。でも石原さん、関さんがそうであったように、私たちは安易に他者を理解することはできないし、共感することもできない。安易に共感するというのは、相手に対して不遜だし、傷つけることにもなるのではないかと思います。だからこそ私たちは他者のことをほんとうは知らない、だから知らなければならぬのだという意思こそが、他者と共感するための第一歩ではないかと思うのです。

おそらく社会学を学ぶこと、大学で学ぶことの第一歩は、知ることだと思うのです。他者のことを知ろうと思うことが、社会学を学ぶことでもあるし、共感すること、相手と分かり合うことの、第一歩なのだろうと思っています。

最後に、アジア・太平洋戦争についていうと、現在記憶の継承という問題が重要になっています。それは阪神淡路大震災も、東日本大震災もそうだし、多分このコロナ禍もそうだと思います。新型コロナウイルスによって亡くなった方が1万8,000人もいるわけです。コロナ禍でたいへんな思いをしている人たちがたくさんいるわけです。見ようとしなければまったく見えてこない人たちがいるはずです。しかもこうした状況に対して、コロナ禍が過ぎ去れば私たちはすぐに関心を失い忘れていくのではないかと思います。私たちはそれに抗って、いかに関心を持ち見ようとし、わかろうとし、記憶しつづけるのかということが、社会学を学ぶわれわれには求められているのではないかと思います。それこそが他者の共感につながるのだと思います。

(社会学部教授)